

高等学校

平成 11 年 度

教育研究員研究報告書

特別活動

東京都教育委員会

教育研究員名簿

| No | 学区 | 学校名 | 氏名 |
|----|----|-------------|-------|
| 1 | 3 | 都立大泉北高等学校 | 村越直樹 |
| 2 | 3 | 都立桜水商業高等学校 | 安藤栄子 |
| 3 | 4 | 都立北豊島工業高等学校 | 河原井伸和 |
| 4 | 5 | 都立台東商業高等学校 | 藤井弘行 |
| 5 | 5 | 都立足立工業高等学校 | 松嶋裕 |
| 6 | 6 | 都立第三商業高等学校 | 西澤裕之 |
| 7 | 6 | 都立葛西工業高等学校 | 逢坂範彦 |
| 8 | 8 | 都立拝島高等学校 | 中谷芳典 |
| 9 | 8 | 都立多摩工業高等学校 | 河合章 |

担当 教育庁指導部高等学校教育指導課 指導主事 三宅 英次郎

研究主題

望ましい集団活動の中で自己を生かす体験を通じ生きる力をはぐくむ指導の工夫

目 次

| | | |
|-----|---|----|
| I | はじめに | 2 |
| 1 | 研究のねらい | 2 |
| 2 | 研究の背景と主題設定の理由 | 2 |
| II | アンケート調査の結果 | 4 |
| III | 実践事例 | |
| 1 | 部活動 | |
| | — 生徒が保護者や地域の人と互いに技術を高め合い、 — 気持ちを通じ合える場を設定することにより生徒の社会性を養う — （バドミントン部の地域合同練習会） | 6 |
| 2 | ホームルーム活動 | |
| | — 一人一人の生徒が文化祭に積極的に参加するよう援助することにより豊かな人間性を 培う — （文化祭での模擬店への取り組み） | 10 |
| 3 | ホームルーム活動 | |
| | — 地域との連携を積極的に推進し充実感や感動体験を与える — （文化祭での和太鼓演奏公演） | 15 |
| 4 | 部活動 | |
| | — 集団や社会の一員として地域や福祉施設との連携を活用し、豊かな心をはぐくむ — （バトントワリング部の特別養護老人ホームへの訪問公演） | 19 |
| IV | まとめ | 24 |

I はじめに

1 研究のねらい

わたしたちは、望ましい集団の中で、自己を生かす体験をさせることにより、考える力、社会性、豊かな心などの「生きる力」がはぐくまれると考えた。そのためには社会の一員としての自覚を深め、地域と連携をとって人間としての在り方生き方の指導の充実を一層図ることが必要である。そこで、本研究では生徒に地域との交流の中で幅広い体験をさせることが大切と考え、学校と地域が協力連携する特別活動の有効な在り方を探っていくこととした。

2 研究の背景と主題設定の理由

人は、集団や社会の一員として、自分の役割を遂行する過程で、自己有用感や他人と協調する心、及び、自ら考え判断し責任をもって行動する力、社会性、豊かな心、自律心などの「生きる力」をはぐくむ。しかし、家庭においては少子化が急速に進み、核家族化・共働きの増加とも相まって、子どもが、親や他の子どもたちと触れ合う機会が減少している。

学校においても、少子化の影響は一部の部活動が成立しなくなるなど特別活動への影響も深刻化している。

一方、通塾・習いごとは子どもたちの自由な交流を一層分断し、また同年齢の者としかかかわらない風潮を生んでいる。さらに、地域の間関係の稀薄化により、子どもたちが老人や幼児などの異年齢の人たちとかかわる機会も、以前より少なくなっている。

このような社会状況を踏まえ、私たちは、次のような仮説を立てた。

- (1) 部活動の中で異年齢の人たちとの交流を深めれば、技術だけではなくコミュニケーション能力や社会性が養われる。
- (2) ホームルーム活動の中で生徒が、他の生徒や保護者など様々な人と出会う機会を設定すれば、人の気持ちや考えを認め合う豊かな人間性が培われる。
- (3) ホームルーム活動で学校行事を進めるに当たり、教師が学校内や学校間で協力すれば、一層充実感や感動体験を与えられる。
- (4) 部活動を通して、地域の中でボランティア活動を実践すれば、人に役立つ体験や様々な人から自分のよさを認められる体験ができ、豊かな心がはぐくまれる。

以下、2つの視点から、実践を通し、このことを検証することにした。

(1) 人の気持ちや考えを認め合う場を設定し、豊かな人間性をはぐくむ指導の工夫（A班）

子どもたちの豊かな人間性は、人と人との真の出会いを体験することによってはぐくまれる。そのためには自らの気持ちや意見を表現し、相手の気持ちや考えを積極的に理解し尊重しようとする姿勢が欠かせない。こうした姿勢はその方法を学ぶとともに、集団の中で様々な場を体験して初めて身に付くものである。しかし、現在の子供たちは少子化や地域の間関係の稀薄化により、そうした体験が乏しい傾向にある。

わたしたちは、特別活動を通し、生徒が人と接する体験の場を広げて、積極的に人とかか

わっていく姿勢を培っていくことが人と人との真の出会いを生み、豊かな人間性をはぐくむ手助けになると考えた。

また、様々な交流を通し、他人や自己の理解を深めたり、集団に貢献することで、成就感や充実感を味わうことができるように援助することが、生徒の社会の一員としての自覚を高め、自らの在り方生き方を考える生涯学習の基盤として、考える力、社会性、豊かな心などの「生きる力」をつけていくことにつながると考えた。

今回、その実践の場として、共通の趣味を通して地域や他校との幅広い交流を図ることができる部活動と、学校における基本的な生活集団として豊かな人間性をはぐくむ土台となるホームルームの指導を取り上げた。各校の生徒の現状を十分に考慮し、その際に掲げた基本姿勢は以下のとおりである。

- ① 集団の中で自信をもって発言ができるような雰囲気とその場面の設定を工夫する。
- ② 一人一人が自分の役割を自覚し、その達成をもって集団に寄与することにより、成就感・充実感を体験できるようにする。
- ③ 様々な場面で生徒がリーダーシップを発揮できるように工夫する。
- ④ 保護者や地域との連携の中で、生徒間及び他者との心の交流を深める。

(2) 集団や社会の一員として、自己実現を図る指導の工夫（B班）

目的意識をもって取り組むことや、人に役立つ喜びを感じることは、集団や社会の一員として自己実現を図るうえで大切なことである。

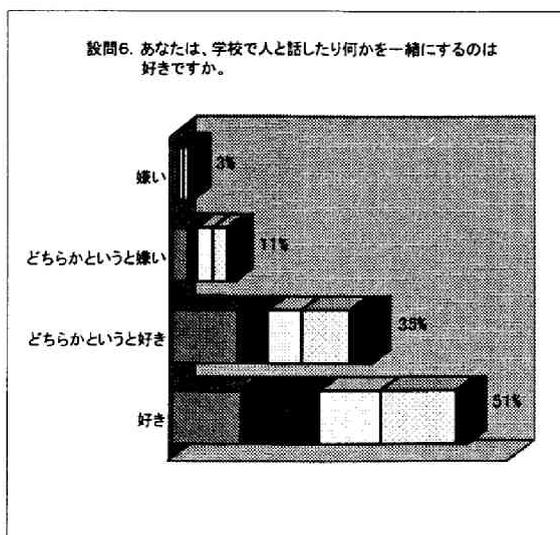
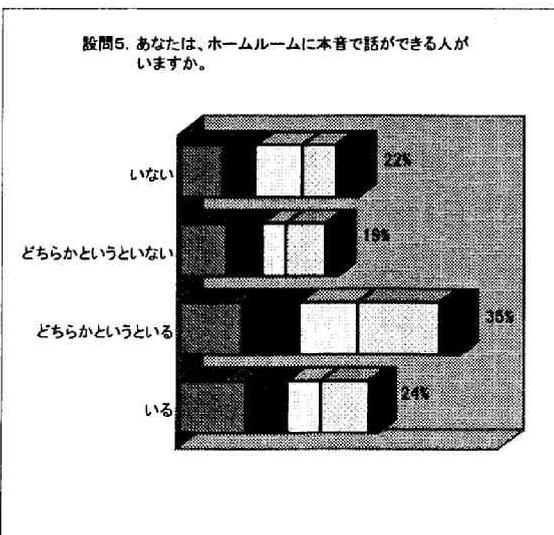
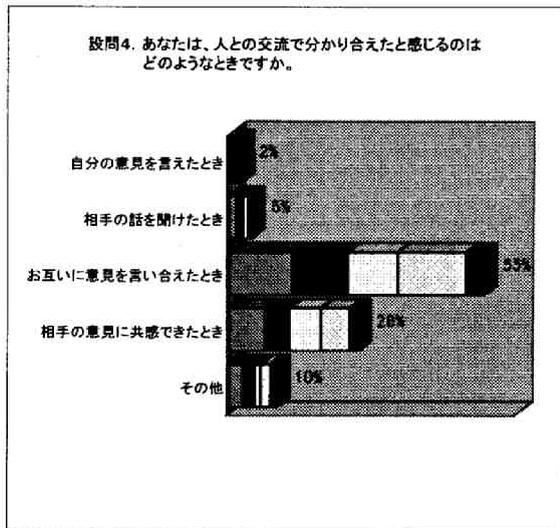
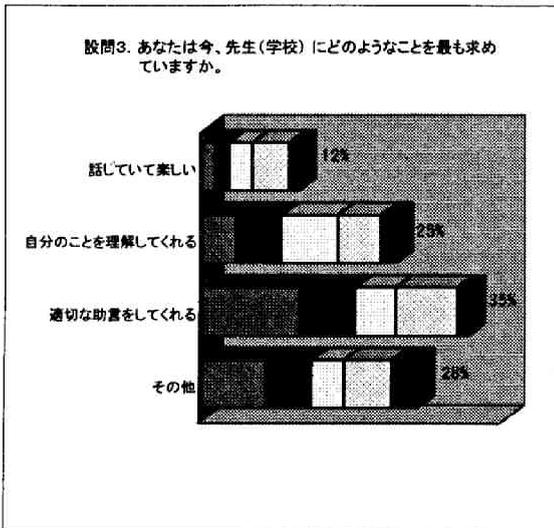
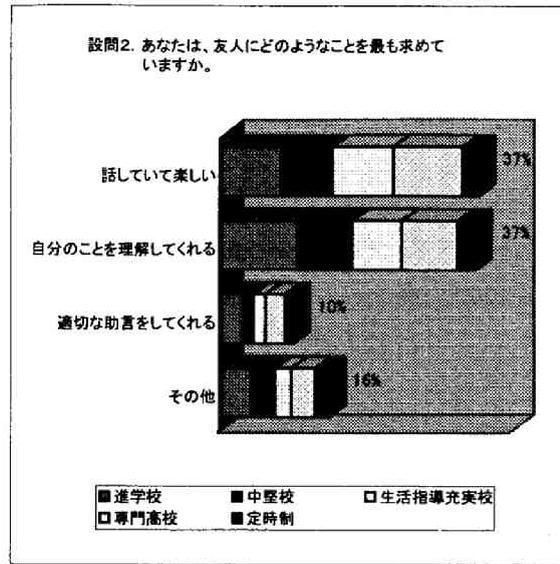
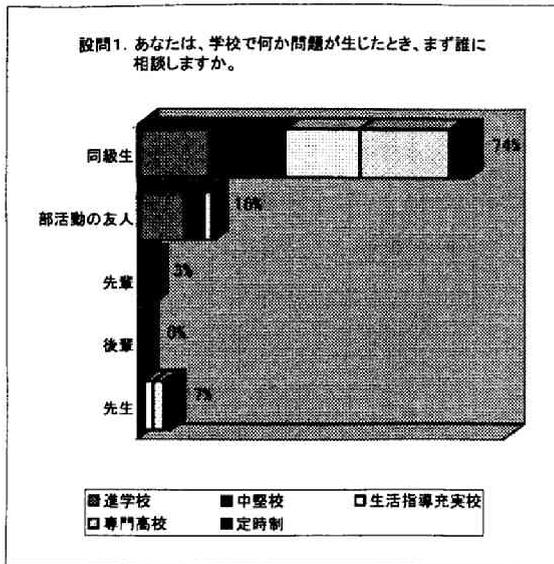
最近では、指示待ち人間や無気力な生徒が増加している傾向がある。また、集団の中での自己の役割を果たせないために、成就感や連帯感を得て豊かな心を育てることが困難になってきている。

このような現状で教師に求められていることは、教えるべき大切なことは丁寧に教え、生徒の可能性を信じて時間的・精神的余裕をもって見守る姿勢であり、適切な援助によって生徒の成長を支援していくことであると考えた。

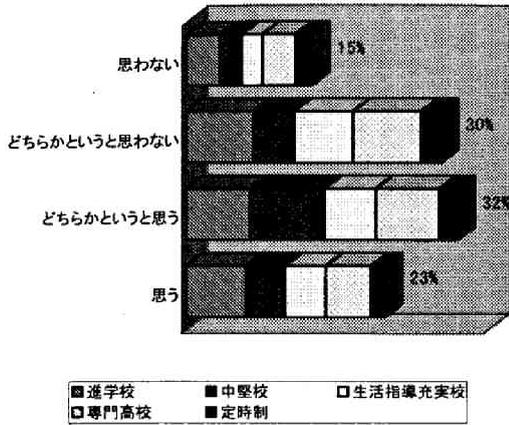
よって今回は、地域・家庭や他校との協力・交流を積極的に図り、生徒自らが感動を体験できるよう指導・援助した。その際の基本姿勢は以下のとおりである。

- ① 計画立案の段階では、目的を達成するための情報や手段を生徒に示す。
- ② 「確かめる」、「待つ」、「関心をもって見守る」という姿勢で、生徒が自ら考えられるような場を随時設定する。
- ③ 適切な評価を与え、生徒の自信と意欲を喚起する。

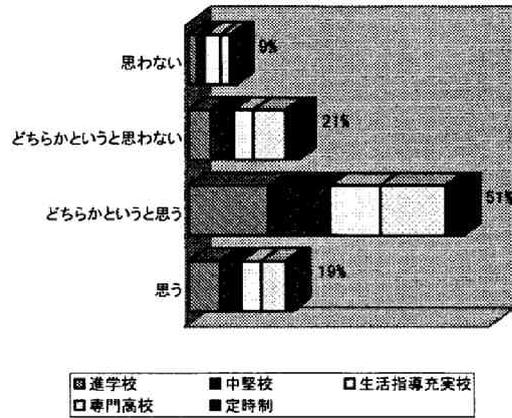
II アンケート調査の結果



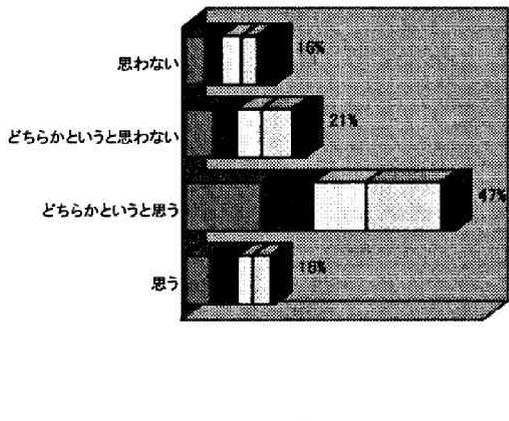
設問7. あなたは、自分の意見をきちんといえると思いますか。



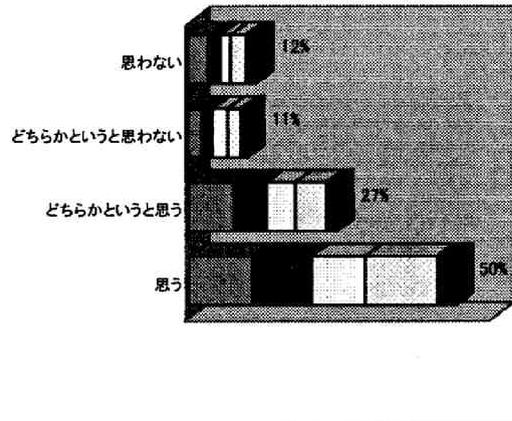
設問8. あなたは、人の意見を聞き、尊重できると思いますか。



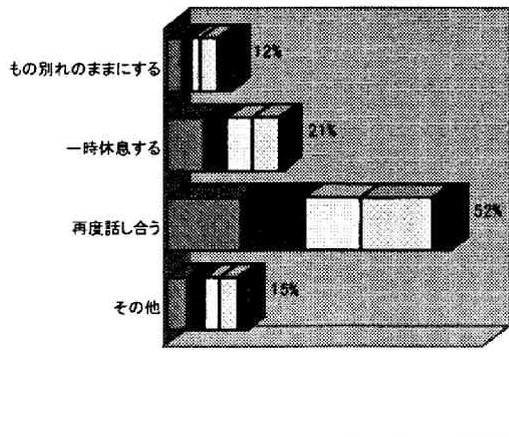
設問9. あなたは、他人とのコミュニケーションがうまく取れていると思いますか。



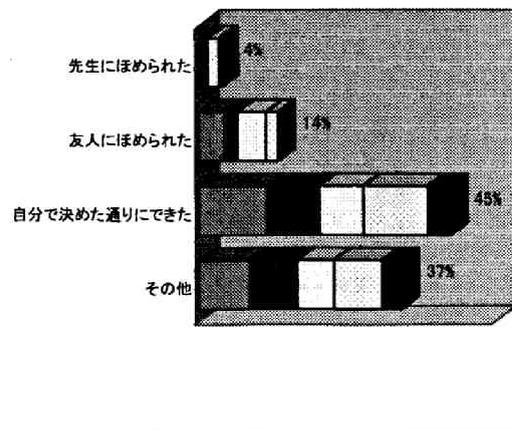
設問10. あなたは、自分の活動する場をもっと広げたいと（人と話す機会を多く作ろうと）思いますか。



設問11. あなたは、話し合いの場で意見の対立が明確になったとき、どのようにしますか。



設問12. あなたは、学校生活において、どのようなとき、満足を感じますか。



Ⅲ 実践事例

1 部活動（A校）

- 生徒が保護者や地域の人と互いに技術を高め合い、
気持ちを通じ合える場を設定することにより生徒の社会性を養う—
（バドミントン部の地域合同練習会）

(1) ねらい

A校のバドミントン部は、男子部と女子部に分かれているが、男子部員が少ないため、日頃合同練習をしている。ともに3年生がいないため、2年生、1年生だけで活動している。男子部、女子部ともにキャプテンはいるがリーダーシップをとることができない。また、技術的に優れたものをもった生徒がいても、中心となって教えることができない。さらに、他の生徒にも、その生徒から学ぼうとする姿勢が見られないのが現状である。

わたしたちは、部員がバドミントンの高い技術をもった地域の人と合同練習をすれば、一層技術の向上が図れ、また、様々な地域の人たちと合同練習をすれば、社会性が養われると考えた。

そこで本研究では、部員が、小・中学生、保護者、地域の人とバドミントンを通じて交流する場を設定し、以下の実現を目指した。

- ① 積極的にコミュニケーションをとろうとする姿勢を身に付ける。
- ② リーダーを中心としてチームとしてのまとまりをつける。
- ③ 個々の技術の向上を図る。
- ④ 異年齢の人との交流を通じて活動意欲を喚起する。



男女で合同練習を進めている場面

(2) 対象

本校の部員 男子5名 女子17名 計22名

(3) 取り組み

① 準備段階までの指導

今回のねらいは生徒と保護者、地域の人たちと、バドミントンを通じて交流をもつことにある。バドミントン部では、日頃、男女の練習や他校との合同練習、また、合宿での他県の生徒との合同練習や試合に取り組んできた。そうした活動・交流範囲の拡大の延長線上に今回の取り組みがあり、部員には保護者や地域の人たちとの今回の公開練習に向けて、技術の向上を図るとともに、その人たちとの交流を大切にするよう指導してきた。

そして、バドミントン部の部員の意識を少しずつ高めていくよう工夫した。保護者、地域の人たちと一緒に何を目標とするのか、どのように公開練習を進めていくのかということを生徒全体で話し合わせたり、生徒一人一人と話し合うなど、公開練習に向けての意識づけをバドミントン部全員の生徒に行なった。

次に、公開練習にいかにして参加者を募るのか、さらに、様々な人たちに参加してもらうにはどうしたらよいのか、生徒たちと話し合ったり、同僚からアドバイスを受けて検討した。

当日、マネージャーの生徒が司会進行を行なうので、3週間前から進行の手順を入念に確認し合い、自信をもって司会ができるように準備しておいた。

マネージャーが本日の時程を説明している様子

初めてのことなので不安や緊張がありながらも真剣に取り組んでいる。



② 当日の内容

| | 時 間 | 生 徒 の 活 動 | 教 師 の 支 援 | 使用するもの |
|-------------|-----------|--|--|--------------------------------|
| 導 入 | 5分 10分 | 講師及び保護者の紹介 準備体操及び諸注意 | マネージャー（司会） の指導、部長の指導 | 参加者リスト 本時のメニュー 班分け表 |
| 展 開 | 30分 | 基礎打ち クリアー ドロップ ヘアピン ドライブ スマッシュ サーブ | 進行状況の把握と適切 な対応 | 医薬品 ラケット シャトル 飲料水 |
| | 10分 | 休憩 | | |
| | 20分 | ルールの説明及び試合形式 の練習 | マネージャー（司会） の指導 | ルール表 |
| | 10分 | 休憩 | | |
| | 30分 | 試合（審判は生徒が行う） | 進行状況の把握と適切 な対応 部長の指導 | |
| ま と め | 35分 | 整理体操 交流会 参加者全員からの一言 | マネージャー（司会） の指導 顧問からの講評 （次回への展望） | |

(4) 参加者の感想

・近隣小学校のバドミントンクラブの保護者ですが、初めて子供たちが先生以外の大人の方や高校生の方たちとバドミントンをやらせていただき、とても楽しそうに練習していたのは良かったと思います。 (小学生の保護者)

・子供たちは自分たちの技術力の低さに悔しさを覚え、より練習に励めたらと思います。上手な大人が周りにおいて、小学生も将来を夢見られるような雰囲気があるので、バドミントンというスポーツを広めるにはとても良い機会ですね。 (部員の保護者)

・これを機会に他の部も計画してみてもいいかと思う。レベルの高いチームと生徒達が一緒に練習できると、もっと技術的に伸びることと思います。

(バスケットボール部員の保護者)

・地域交流という形でのバドミントン。見学だけでしたがアツと言う間に時間が過ぎ、とても楽しい時でした。これからも地元の方がバドミントン部にコーチに来て下さると聞き、とても素敵なお話だと思います。

(部員の保護者)

・若い人たちと何かやってみたくて。このような交流がもてて大変すばらしかったです。

(クラブチーム会長)

・技術力の高い方たちと一緒にプレーができて、とても良かった。

(部員)

・司会は初めてで、緊張しましたが、大変すばらしい経験をさせてもらいました。また機会があったら、頑張りたいです。

(バドミントン部マネージャー)

(5) 結果と考察

A校のバドミントン部は、①実力差が激しい、②自己表現力が乏しく、コミュニケーションがうまくとれない、③お互いに教え合う気持ちがない、などの問題を抱えていた。

この現状を打開するため、夏の合宿では、長野県の高校との合同練習や試合を行った。そこで負けた悔しさをバネに、生徒同士がお互いの技術の向上に向けて、話し合いをできるように意識を高めていった。

今回の公開練習により、部員は今まで以上に技術の向上を目指すだけでなく、人と人との気持ちを通じ合えるという体験をした。そのことで、幅広くコミュニケーションを図ろうとする姿勢や、お互いに教え合い、学び合おうとする姿勢を身に付けて、生き生きと練習に取り組むことができるようになった。

結果として、実力差については、クラブチームの方が生徒の技術に応じた対応をしてくれたことにより、それぞれが自分のレベルで楽しむことができた。また、小学生に教えるという体験を通して、生徒が自分からすすんでコミュニケーションが図れるようになり、自己表現力が芽生えてくる様子も感じられた。今回の体験で得た精神的な面での広がりや強さは大きく、その後の公式戦においても、ねばり強い試合を行った。また、声がよく出るなど、チームとしてのまとまりもついてきている。

今回の公開練習の取り組みで、生徒は好きな競技を通して多くの人とふれ合う楽しさを知ったように感じられた。今後もこうした活動を継続的に展開し、部員が積極的に、地域の人たちと交流する過程で、バドミントンの技術だけでなく、社会性を養うよう指導・援助していきたい。

学校の中の一つの部という狭い人間関係の中で、お互いのコミュニケーションがうまくとれずにいたとき、地域との交流を通して部員は自分たちの部活動の在り方を、一層見つめられるようになったと思う。また、様々な年齢層が楽しむ姿を見たことは、バドミントンという種目に対しても受けとめ方が広がったと考える。生徒には、現時点では技術の向上を目標として指導していくが、将来的には生涯スポーツとしての視点も含めた指導をしていく考えである。

2 ホームルーム活動（B校）

一人一人の生徒が文化祭に積極的に参加するよう援助することにより豊かな人間性を培うー
（文化祭での模擬店への取り組み）

(1) ねらい

学校生活の中で、さまざまな出会いの場を通して、人の気持ちや考え方を認め合い協力し合うような体験を重ねていくことは、より豊かな人間性がはぐくまれるよいきっかけとなる。

しかし、B校は都立高校の中の生活指導充実校の一つであり常に何か不満をもっている生徒が多い。その結果、積極的に人とかかわろうとしない傾向が見られる現状がある。「つまんない」「だるい」が口癖のようになっており、満たされない不満げな顔をしている。また、用事を頼もうとすると「嫌だ」「何で自分に頼むの」「ほかの人に頼めば」という言葉が生徒から頻繁にかえってくる。生徒たちは人に何でもやってもらうことを求め、人に自らかかわろうとすることを避けるので、ホームルームにおいても集団としての活動を苦手とし、なかなかまとまらない。

そこで本事例では、『基本姿勢』に沿って文化祭に取り組むことで、自己を生かす体験を通じ生徒相互が互いに気持ちや考えを認め合う思いやりの心などの「生きる力」がはぐくまれるようなホームルーム活動を計画した。

(2) 対象

3年生 25名 （男子6名 女子19名）

(3) 取り組み

11月の文化祭に向けて、生徒たちは高校生活最後の文化祭を「模擬店」で参加することに決定した。

文化祭当日までの生徒の動きと教師の指導のポイントを表にまとめた。（表1参照）

① 話し合いの雰囲気づくりからテーマ決定へ向けて

担任は生徒の自発的な意見がでるように時間をかけて話し合うことにした。生徒の自主的活動を支援し、話し合いをしやすくするため、実行委員と打ち合わせを行い、アンケートを実施しアイデアの募集を行うと提案した。

昨年の文化祭で、本事例の生徒達は、グループごとに分かれ、卵の殻で絵を作成し「世界のアート」というテーマで展示部門に参加した。2か月以上かけて、とても細かな作業を丁寧に行い、生徒たちの中に自負心が芽生えたが、最優秀ではなかったのも、悔しさが残っていた。

そこで、今回は展示以外で挑戦し参加するという生徒からの提案があり、話し合いを進めていくことにした。

飲食店をやりたいという意見が出てくるが、そこから先は具体的な案が出ず、なかなか進まないでいた。テーマ決定期限ぎりぎりの4時限目のロングホームルームで、おなかをすかせた生徒が「焼き鳥を食べたい」と言い、それを聞いた生徒の一人が「Aさん家の焼き鳥がおいしかったから焼き鳥屋がやりたい」と意見を出した。実は、A子は、日頃家業

を手伝っており、炭火で焼いていた。

そこで、司会をしていた実行委員が意見として取上げ、決を取り全員一致で、実行委員とA子がリーダーとなって焼き鳥屋で進めていくことに決定した。また、肉の仕入れはA子の実家の仕入先から都合をつけてもらうことにするなど、全面的にA子の実家に協力してもらいながら、本格的焼き鳥屋を屋外で挑戦することにした。

表1 文化祭までの生徒の動きと指導上のポイント

| 時 期 | 生徒の取り組み | 指導のポイント |
|--|--|---|
| 6月中旬 ロングホーム ルーム | 企画検討 (1)企画アンケート(集計・発表) (2)グループ別の話し合い 意見が出ないので、まとまらない日がつづく。 | 過去の3年生の出し物の説明 話し合いの雰囲気作り 生徒一人一人の発想を尊重する。 |
| 9月中旬 ロングホーム ルーム | 模擬店(焼き鳥屋)に決定 本物、プロの味をめざす。 実行委員がリーダーとなって 役割分担、作業内容を検討 販売品目の決定、役割分担決定 協力体制を考える。 | ホームルームの団結、一人一役 全員参加を目指す。 実行委員と事前に打ち合わせを する イメージを膨らませるように焼 き鳥屋の探検を呼びかける。 プロのアドバイスを求める。 |
| 10月初旬 体育祭 中旬 ロングホーム ルーム 下旬 | 文化祭までの予定表作成 プロパンガス、テントの手配 チケットの用意 試作会 準備 | 本番へ向けての手順を示すよう にする。 屋台の焼き鳥屋の写真を撮影し 掲示をする。 |
| 11月 文化祭前日 文化祭当日 文化祭後の ロングホーム ルーム | 感想文と反省会 | 感想文を学年だよりに載せ相互 理解を図る。 |

② 協力体制づくりへ向けて

「焼き鳥屋を成功させる」という集団の目標を達成するためには、一人一人が自分の役割を自覚し、互いに協力し、責任を果たしていくことが大切であると考えた。

そこで、担任は実行委員と相談し、ホームルームの協力体制を作り、参加意識を高めるための工夫を考えるよう支援した。

ア 文化祭までの予定表作成

学校の予定とホームルームの予定の進行状況が一目で分かるように模造紙に書き、教室の横に掲示することにした。このことによって作業予定や活動内容がいつでも分かるようにした。(写真1参照)

イ 役割分担表の作成

分担表を作成し配布することで、実行委員は誰が何の担当かをよく把握でき、生徒たちは、一覧表になっていることで、自分の仕事は何であるかも分かり、友達の作業内容も分かるようになった。このことで「自分も参加している」と意識できるようになった。(表2参照)

表2 文化祭に向けて係のすること やきとり 3-4

| | |
|--------|--|
| 焼く係 | ____さん____さん 仕事 日、爪は短く切り、アクセサリなどはつけない。三角巾、エプロンを必ず着用。試作会は19日にやったので、当日も同様に。あと、消毒液で手をよく洗うことが大切。 |
| 材料運ぶ係 | ____さん____さん 仕事 お客様が来たら焼く人の指示に従って、食物室の窓から材料を渡す。食物室から出る時は、エプロン、三角巾をはずす。消毒液で手を洗う。 |
| 焼き鳥渡す係 | ____くん____さん 仕事 チケットと引き換えに焼き鳥を渡す。一味唐辛子をかけるかどうか聞いて、かけてあげる。 |
| 会計係 | ____さん____さん____さん 仕事 材料や準備にかかったお金の計算。売り上げとか。 |
| 宣伝係 | ____さん____さん____さん 仕事 10枚もらった画用紙に、やきとり3の4の広告作り。当日ビラ配り以外の宣伝方法を考えてほしい。 (例)のほりを持って、校内を歩いて宣伝したり、大声でがんばる。 |
| 準備係 | ____くん____くん____さん____さん(その他役割の少ない人も) 仕事 学校のテントが借りられるようになったので、大変だと思うけど、その組立が主です。その他、指示通りに動いてください。 |
| 看板係 | 仕事 とりあえず下書きが____さんだけど、その後ペンキを塗ったりとか、やることがあるから、他の人も進んで手伝ってほしい。放課後とか昼休みなど、時間に余裕のある人はお願い。看板の締め切りは11月6日(土) |
| 会場装飾係 | ____さん____さん(いろいろな人も手伝ってほしい。2人じゃムリでしょ) 仕事 どんな感じのお店にするか。飾りはどうするか。のれんやのほり作りをしたり。まだ、時間はあるから、いろいろ考えてみて下さい。11月の2・3日くらいにアイデアを言ってほしい。できればもう少し早めでも。もし何か買ったりするならお金のこともあるし。 |
| 受付係 | ____さん____さん____さん 仕事 交換するチケット作り。当日、お金と引き換えにチケットを渡す。 |

③ プロ(保護者)のアドバイスを受けて

何をいくつ販売するのかを決定するために、全員で意見を出しあうが、初めてのことなのでどう決めてよいのか分からず、保護者に意見を求めることにした。

「素人にはメニューは1種類のみで、本数は1日180本が限界」とアドバイスを受け、それを踏まえて話し合った。

④ 文化祭当日(写真2参照)

文化祭当日は、教師は、生徒が自分たちで考え、行動できるよう生徒を信頼し、じっと見守るよう心掛けた。

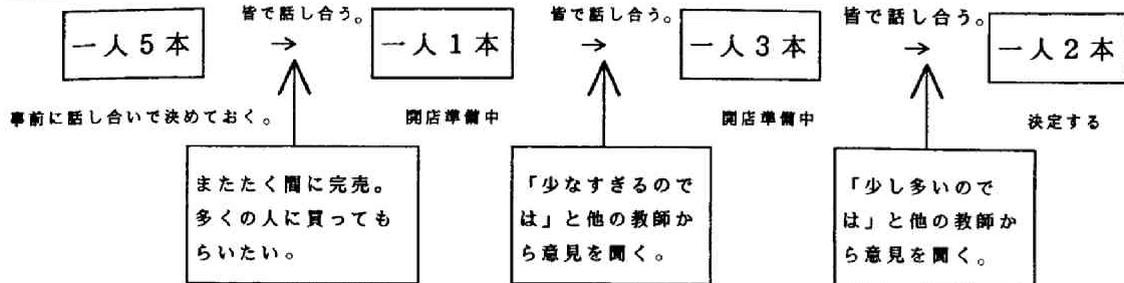
その結果、生徒たちは自主的に当日の目標として(1)お客様に気持ちよく買ってもらう(2)順調に販売活動ができる(3)ゴミの管理もしっかりする、ということ掲げ、役割ごとに助け合った。自分たちで判断し、責任をもって行動していることで、文化祭初日に生じた問題も、2日目の開店までには克服し、生き生きとそれぞれの仕事に専念していた。(次項参照)

問題克服過程

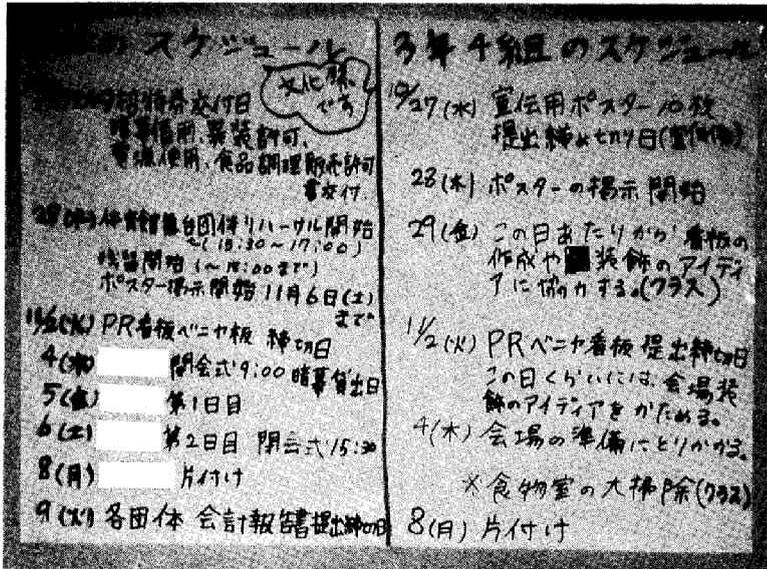
焼き鳥一人あたりの販売本数決定過程（1日180本、1本当たり50円）

初日

2日目



販売本数を決めるにあたって、多くのお客様が納得できる本数になるように話し合った。



(写真1)

文化祭までの予定表が、教室に掲示してある。

(写真2)

文化祭当日、持ち帰り用の焼き鳥を用意しているところである。



(4) 生徒の感想

- ・ いままでこんなに一生懸命やったことがなかった。とても疲れたけど、またやりたい。(今年が最後だけ)
- ・ みんなで協力することの大変さとすばらしさを学んだ。
- ・ みんなで話し合っ、意見を出し合っ、焼鳥屋をつくっていくことで、ホームルームのまとまりと充実感を感じた。
- ・ 初めは無理だと思っていたけど、無事終わってホッとした。

(5) 結果と考察

文化祭の2日間、3人が欠席したが、22人が協力して、学年最優秀賞とPR賞の2つの賞をもらうことができた。

全員参加ではなかったが、準備過程で、生徒一人一人が努力し、助け合い、多くの知恵と経験を出し合えたことがよかったと思う。

日頃控えめであった生徒が実行委員として行動していく中で、リーダーとしての自覚をもち、全体に指示を出せるようになっていった。また、他の生徒たちも、積極的に協力して実行委員を支えてあげよう、そして成功させようという気持ちに徐々になっていき、思いやりや協調性が育っていった。そして、生徒たちは今までは分からないことは投げ出していたのに、今回は焼き鳥に関して分からないことなどは、よく知っているA子やA子の保護者に聞いたり、手伝ってもらうなど、素直に人の意見を聞き、考えて、やってみるということができるよう成長していった。

また、文化祭後のA子は「こんなに大変なことを毎日やっているなんてすごいと思う、尊敬するよ」と言っていた。父親の働いている姿は見ていたし、知っているつもりでいたが、実際に自分が中心となり体験してみて、改めて仕事の大変さに驚いたというのである。

今回実施した研究員のアンケートでは、自分の意見をきちんと言えないなど、コミュニケーションをとることを苦手とする傾向が出ていた。本校の生徒も同様であったが、生徒の感想によると、協力し合いながら、自分たちで成し遂げたということで、互いに自信がつき、積極的にコミュニケーションを図ることができるようになった様子がうかがえる。自分の役割を果たし、互いに協力し、個の力が集団の中で生かされていくことで、成就感や充実感が生まれ、自らの自信につながったと考えられる。そしてその自信が、思いやりや協調性をもった豊かな人間性をさらに育て、社会の一員としての自覚を高め、「生きる力」になっていくと考えられる。

今後もさまざまなホームルーム活動を通して、教師は、生徒一人一人が各自の役割を自覚し、主体的にさまざまな創意工夫ができるよう、また、生徒たちが互いに理解し、認め合い、協力して活動できるよう、適切な指導と助言をしていくことが大切であると考えられる。

3 ホームルーム活動（C校）

—地域との連携を積極的に推進し充実感や感動体験を与える—
（文化祭での和太鼓演奏公演）

(1) ねらい

C校では、部活動への加入率が約20%と低く、活動を継続的に行う部活動は少ない。また、ホームルームで学校行事を行う場合でも、放課後を学校外で過ごす生徒が多いため、共通の目標をもって活動することは難しい面がある。その結果、集団活動において意欲的な活動ができず、豊かな人間関係が生徒間や生徒と教師の間に生まれにくい傾向がある。この点を改善していくためには、生徒が「やればできるんだ」という気持ちを味わうことができるよう指導・援助することが大切だと考えた。

C校にはかつて和太鼓の演奏を指導し、感動体験を与えたことがある教師がいた。その教師は、この経験を生かしながら、副担任として担任に以下の理由から和太鼓演奏をしてみてもどうかと勧め、実現にこぎつけた。

- | |
|--|
| <p>(1) 和太鼓は自然界の生物より作り出された物なので人の心に響きやすい。 →多くの人間（年齢性別を問わず）に気持ちを伝えやすく、他と交流することができる。</p> <p>(2) 練習は大変だが、生徒にとって課題がはっきりしやすく生徒の意欲をひきだしやすい。 →目的意識を高めやすく、共通の目標をもつことができる。</p> <p>(3) 一人一人の個性に合わせた活動ができる。</p> |
|--|

しかし、以下のような問題点もある。

- | |
|--|
| <p>(1) 校内に指導者がいない。</p> <p>(2) 器材が足りない。また器材が大型なので運搬が難しい。</p> <p>(3) 太鼓の練習では大きな音が出て、校内・校外を含め周囲に迷惑がかかる。</p> |
|--|

そこで、これらの問題点を克服するために、地域の協力を積極的に求めることとした。

(2) 対象 3年1組（男子 11名 女子 17名 計 28名）

(3) 取り組み

① 生徒の意欲をひき出す指導の工夫

生徒の意欲をひき出すためには、企画決定の過程はとても大切なものであると考えた。表1に指導の流れを示す。

上述の教師は副担任として、担任から文化祭の出し物の案を考えるよう依頼されていた。副担任が和太鼓演奏を提案したとき、担任はあまり賛成しなかった。しかし、数名の生徒がホームルームの出し物として是非和太鼓演奏をやりたいと言ったとき、担任の気持ちが変化していった。そしてこのことは副担任と担任が共通認識をもって指導をする契機となった。また副担任が理想を語り目標を明確にすることで、生徒の和太鼓演奏に対する不安感を和らげることができ、さらに意欲をかき立てることができた。

【表1. 指導の流れ】

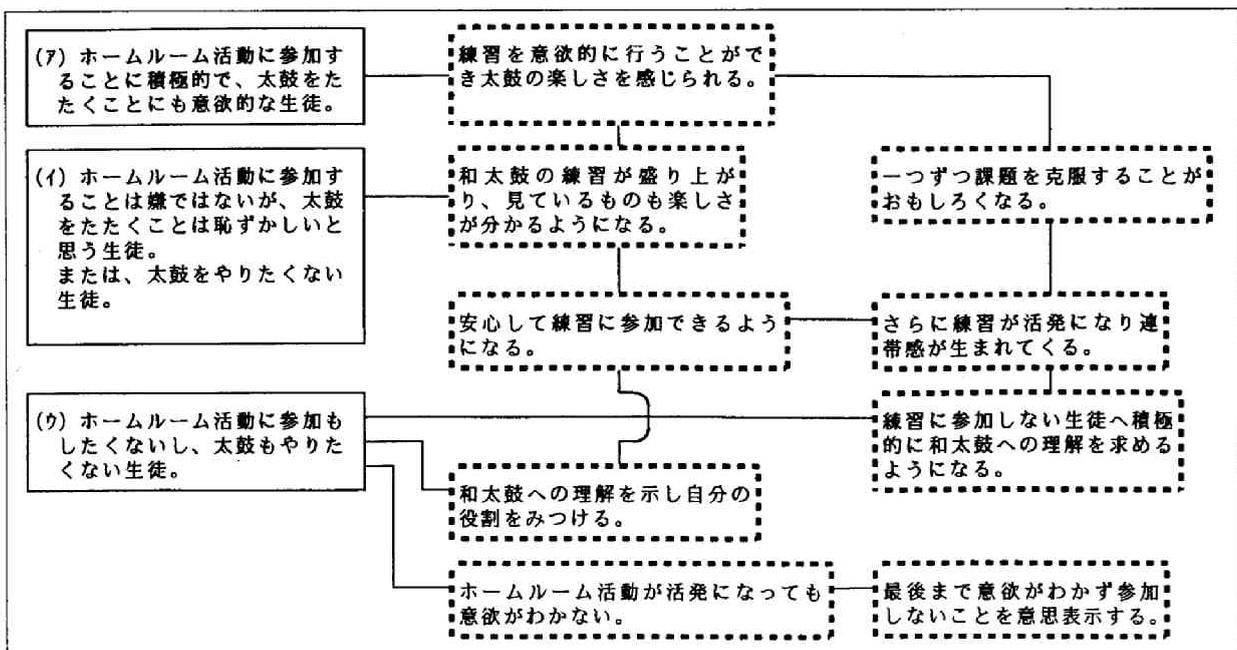
注：○抜き数字は、時間の経過を示す。

| 生徒の活動 | 副担任と生徒のかかわり | 副担任と担任のかかわり |
|--|---|--|
| <p>② 生徒Aは興味をもち、ホームルームで取り組んでみようという話を周囲にもちかけ、多くの生徒が賛同した。 しかし、担任は反対した。</p> <p>⑤ 生徒は実現可能かどうか話し合いの場をもつが、和太鼓演奏に対して不安を示す生徒がいて、意見はまとまらなかった。 そして、生徒は話し合いの結果、ホームルーム全体に対して、和太鼓演奏の魅力について教師から説明をしてもらい、不安を解消することを考えた。</p> <p>⑦ 話を聞き、さらにイメージをわかすためにビデオを見る。その後、ホームルーム内で話し合い、採決を行い多数で可決した。生徒は担任に再度申し出て、了承される。</p> | <p>① 生徒Aに文化祭で和太鼓演奏をやってみないかと話をした。</p> <p>③ 生徒から、担任に反対されたが和太鼓演奏に取り組みたいという申し出があったので、協力することとした。生徒には、みんなで実現可能なのかを再確認させた。</p> <p>⑥ 生徒・担任からの依頼を受けて、ロングホームルームにて、和太鼓演奏の魅力、イ、準備の大変さ、ウ、文化祭におけるホームルーム活動の理想について話す。</p> | <p>④ 担任に和太鼓演奏について説明し、ホームルームで実現可能かどうか話し合った。 担任の不安はかなり解消され、生徒の気持ちしいでは実施できることを確認した。 また、担任からクラスで和太鼓演奏をやることについて生徒に、準備の大変さを説明してほしいと頼まれる。</p> <p>⑧ 担任から協力を正式に要請される。</p> |

② 一人一人の個性を尊重し生徒が安心して活動に参加できる指導の工夫

C校の生徒は自ら課題を設定し主体的に取り組む姿勢のない者が多い。特に表現力の乏しい生徒にとっては、意欲はあっても行動力が伴わないこともある。原因としては、結果を恐れる不安感にあると思われる。自ら自主的に行動していくためには、そのような不安感を取り除くことが必要だと考えた。また意欲的な生徒を活動の中心に据えることで、ホームルームの中の雰囲気づくりに努めた。以下、図1にホームルーム内の生徒の動きをまとめてみた。

【図1. ホームルーム内の生徒の動き】



③ 成就感を味わわせる指導の工夫

生徒の目的意識が高いほど、達成できたときの成就感や感動は大きなものとなる。和太鼓演奏には実施上の困難もあるが、生徒たちの可能性を広げていくために、本事例では地域との連携を積極的に利用していくこととした。そこで副担任は、担任の意向に添いながら、地域と学校を結びつけるよう努めた。

| 問い合わせ先 | 問い合わせ内容 | 結 果 |
|------------------|------------------------------------|--|
| 区役所生涯学習課 | ・地域の太鼓の指導者 ・太鼓などの器材を借用させてもらえる場所 | 太鼓の指導者として区に登録している方を紹介してもらう。 情報なし |
| 和太鼓店・地域町会 | ・太鼓などの器材を借用させてもらえる場所 | 借用できるものなし。 |
| 近隣の小学校 中学校・高校 | ・地域の太鼓の指導者 ・太鼓などの器材を借用させてもらえる場所 | E高校に和太鼓部があるという情報を得る。 →顧問の先生と和太鼓部員の協力を得る。 小学校・中学校は部活動が活発で借用させてもらえず。 近隣の都立高校より器材の借用を許可していただく。 |

また具体的な活動の内容とねらいを以下に示す。

E高校和太鼓部

- ・A高校で2回練習会を行った。

同じ高校生の中で教え合いの場をもち、交流を深める。
また本校の生徒が具体的なイメージをもつよう指導する。

E高校の顧問

- ・本校に4回ほど来ていただき、講習を受けた。
- ・構成、演出、衣装など助言をもらった。

高い技術を目の前で見ることで、生徒の目標をはっきりさせる。
練習の課題を提示してもらう。
公演の助言者になってもらう。

前任校

- ・器材の借用をお願いした。
- ・前任校の文化祭で和太鼓演奏した3年生に来校してもらい合同練習をした。

ホームルームで和太鼓に挑戦したという他校生と交流することで、やればできるという気持ちを高めさせた。

都立高校3校

- ・器材の借用をお願いした。

太鼓は高価なものなので取り扱いには十分注意させた。

(4) 生徒の感想

- ・他校の先生や生徒と交流することは、とても勉強になった。
- ・あまりホームルームで話さなかった子と話せるようになった。
- ・やりだしたら楽しくて自分から積極的に練習するようになった。
- ・いろいろな人に見てもらえてよかった。
- ・成功してすごく感動した。
- ・自分にとっていい経験になった。
- ・太鼓が大好きになった。
- ・また機会があればやりたい。
- ・他にやりたいという人がいたら協力したい。
- ・無理だと決めれば何もできないが努力すれば何でもできると思った。
- ・ホームルームで分担して、もっと効率よくやれたのではと思う。
- ・太鼓を借りてくるのも先生にやってもらって、もっと自分たちでできればと思った。

(5) 結果と考察

継続的な活動をする経験の少ない本校の生徒が、1カ月半にわたり準備を続け多くの観客の前で公演することができたことは、それだけでも大きな成果であった。生徒が意欲的に活動できた要因は、和太鼓演奏を行う目的意識の喚起にあると思われる。しかし、教師が生徒にただ和太鼓演奏を勧めても、生徒は選択できないこともある。そこで和太鼓演奏を実践するに当たっては、生徒にそのねらいを認識させることが大切である。本事例においては、和太鼓演奏を通じて何ができるのかという理想を教師がしっかり語り、生徒に考えさせることができた。どのような集団活動においても、教師はその活動の目的意識を生徒にどうもたせるかが重要であると感じた。

また「無理だと決めれば何もできないが、努力すれば何でもできると思った」「多くの人に見てもらえてよかった」などの感想が得られたことは、100名を越える観客を前に公演を終えた生徒たちに成就感を味わわせ、感動体験となったことを意味すると考えられる。さらに「和太鼓をやりたいという人が他にいたら協力したい」というような、自分が得た経験を他のために役立てていきたいという感想が得られたことは、予想外に嬉しいことであった。

このような成果は、学校内の教師の協力と学校間の協力・連携によるところが大きい。この協力を得られたことで、生徒の可能性は大きく広がり、充実した活動ができたといえる。しかし、積極的に地域へ協力を求めることは生徒にとって容易なことではなく、教師の地域への働きかけがとても重要である。多様化する生徒に集団活動の魅力を感じさせていくためには、教師には地域と学校を結びつけていくコーディネーターとしての役割が大切になるだろう。

4 部活動（D校）

一 集団や社会の一員として地域や福祉施設との連携を活用し、豊かな心をはぐくむ一
（バトントワリング部の特別養護老人ホームへの訪問公演）

(1) ねらい

D校では部活動推進委員会を設け、部活動への参加を呼びかけているが、活動率の目標数値には未だ至っていない。しかし、その中でバトントワリング部(以下バトン部)は計画的・継続的かつ熱心に活動を行っている部の一つである。バトン部は体育祭・文化祭などの学校行事を発表の場として活動しており、学校外での活動経験がない。そこで、顧問の教師は学校外の人たちの前で、練習の成果を披露してみてもどうかということを提案し、考えさせた。今回は下記の3点をねらいとして取り組むことを計画し、実践を試みた。

地域社会と連携を図ることで、部活動の活動範囲を拡大し、感動体験を通して自己実現を図る。

ボランティア体験を通して、人間としての在り方生き方を考えさせ、豊かな心をはぐくむ。

問題意識をもって取り組み、奉仕の喜びを味わうことで、社会性を培う。

(2) 対象

バトントワリング部 女子15名 （1年生 5名・2年生 2名・3年生 8名）

(3) 取り組み

部活動に参加する生徒は、個人差はあるが目的意識を各自がもっていると思われる。

D校のバトン部は、人前で踊ることが好きな生徒が集まって活動している。しかし、「それだけでは学校行事での発表に終始し、自己満足で終わってしまうのではないか」と部員に提案した。そこで、まず学校外の身近なところでバトンなどを使った演技を発表する場がないかと問いかけたところ、生徒の中から、児童館・保育園・老人ホームなどの施設があるという声が出てきた。話し合いの結果、近隣の特別養護老人ホームに出かけてバトンやフラッグなどを用いた演技を披露することになった。

バトン部の特別養護老人ホームへの訪問演技の指導案

| 生徒の活動 | 指導上の留意点 |
|---|--|
| <p>① 企画検討（新たな取り組みを考える）</p> <p>話し合い</p> <p>毎日の活動の成果を、校外において発表する方法を考える。</p> <p>地域に貢献できないかを考える。</p> <p>→バトンを中心とした演技を近隣の施設に出向き、演技を行うことに決定。</p> <p>普通練習</p> <p>地域近隣の施設の情報収集</p> <p>役割分担決定（演技分担とプログラム作りなどの係分担）</p> <p>② 訪問可能施設への予約 → 内諾の実現</p> <p>③ 事前施設見学と訪問（初めてのふれあい）</p> <p>④ パート別グループ結成</p> <p>曲目と振り付けの選択</p> <p>特別練習開始</p> <p>振り付けの練習</p> <p>⑤ ポスターの作製（施設のお年寄りに公演予告）</p> <p>振り付けと曲合わせ</p> <p>事前施設訪問（食事介助体験など）</p> <p>プログラムの企画・構成（全体の展開を決定）</p> <p>⑥ リハーサル（演技の工夫）</p> <p>⑦ バンフレットの作製（当日配布する）</p> <p>直前打ち合わせ（器具・環境を含む）</p> <p>⑧ バトン演技（約20分～30分）</p> <p>⑨ お年寄りとはバトン部の交流会（約40分）</p> <p>反省会</p> | <p>・活発な意見やアイデアが出るような雰囲気作りをする。</p> <p>・情報収集の手順について助言を行う。</p> <p>・全員がわかるように考えさせる。</p> <p>・訪問を予約する際の接遇・マナーを体得させる。</p> <p>・見学を含め、お年寄りとは意志疎通を図る。</p> <p>・施設訪問での感触をもとに望ましい内容を検討させる。</p> <p>・進行状況を確認させる。</p> <p>・文字の大きさ・コントラスト・表現内容が工夫されているか助言する。</p> <p>・表現力についての工夫がなされているかを確認する。</p> <p>・意志疎通をさらに図る。</p> <p>・時間配分や構成内容の工夫を確認する。</p> <p>・演技者と鑑賞者が一体となるように工夫されているかを確認させる。</p> <p>・文字の大きさ・コントラスト・表現内容が工夫されているか助言する。</p> <p>・失敗を恐れず、自信をもたせる。</p> <p>・積極的にお年寄りの中に入るようにさせる。</p> <p>・取り組み内容が自己にとって、鑑賞者にとってどのように活かされるかを考えさせる。</p> |

※ 指導案の番号は右ページの活動経過と関連している。

バトン部の活動内容

準備

- ① 企画検討の段階では鑑賞者の対象として子供やお年寄りなどが出されたが、最初の取り組みとしてお年寄りに元気を伝えたいという気持ちが固まる。
- ② 地域や施設の方々に自分たちの活動の趣旨を説明し、内諾を得るために訪問の予約をする際の挨拶や接遇・マナーを習得する。
- ③ 部員全員が老人ホームの施設見学は初めての経験である。
- ④ 施設見学後は構成内容にも工夫を凝らす意見を交わし、練習では顔の表情作りをすることなどを意識して、普段よりもより一層きめ細かく取り組む。
- ⑤ ポスター作製は、事前に施設のみなさんに訪問公演があることを知っておいてもらいたいという生徒のアイディアで取り組む。3枚のポスターを作製し、各フロアに掲示してもらう。
- ⑥ 直前のリハーサルにおいては、単調に演技をせずに、感動を与えられるような内容や表情を意識して取り組む。
- ⑦ パンフレットの作製では、ポスターよりもさらに公演に興味をもってもらいたい、いつまでも思い出に残してもらいたい、そのような思いで作製する。
作製にあたって施設の職員の方から次のアドバイスをもらう。

- ・文字は大きい方が読みやすい。
- ・文字と紙の色のコントラストははっきりした方が読みやすい。
- ・病気をされている方もおられるが病院ではないので表現に工夫をしたほうがいい。

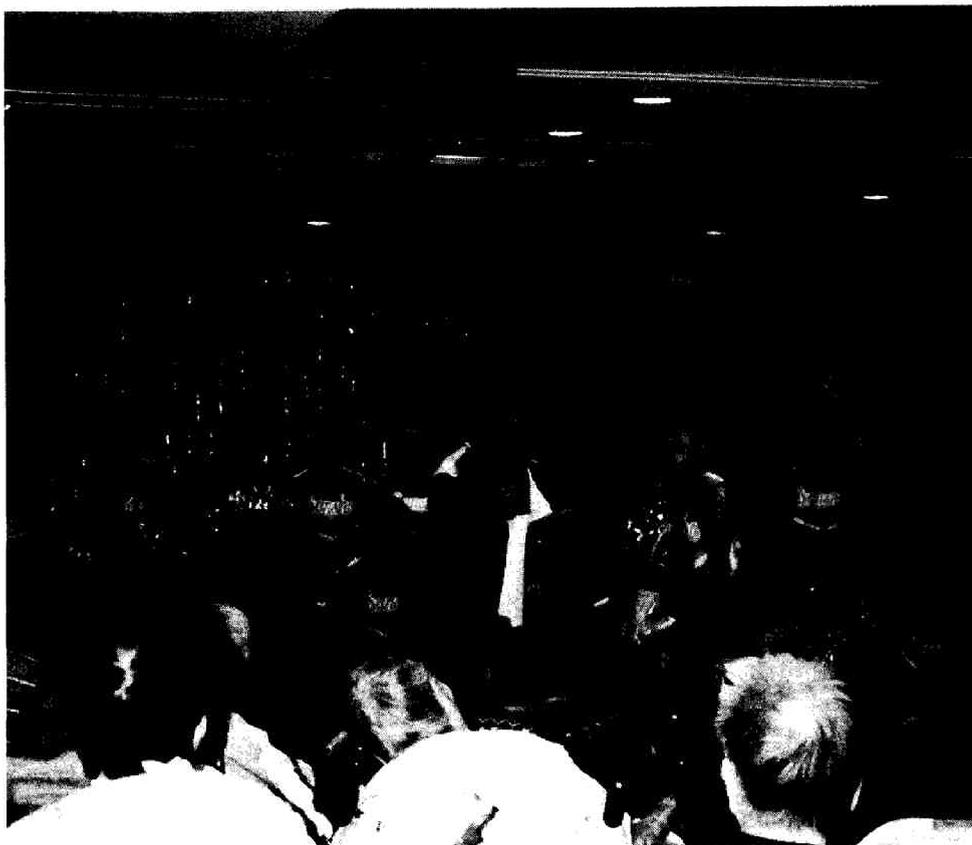
手書きのメッセージを取り入れ、心のこもったものにする。

公演

- ⑧ 演技当日の始めと終わりの司会進行は、施設の職員の方にお問い合わせをした。緊張が感じられるがまずまずのスタート。お年寄りの反応はあまり得られない。
1曲目の演技後、リーダーから挨拶。
2曲目と3曲目は連続して演技。鑑賞されているお年寄りも手拍子やかけ声も出てくる。部員と一体となっていることが感じられるようになる。
3曲目が終わり、リーダーから語りかけ。和やかな中、最終演技。特に3年生の今回限りによる引退公演。精一杯の笑顔でお年寄りに演技を行う。
終演を迎えて、記念の花を代表の方に渡し、お年寄りに感想を伺う。「ありがとうございます」「今回のみなさんのがんばりを支えに私たちもがんばります」という言葉をいただき、お年寄りと部員が感謝の心を表す。

公演後の交流

- ⑨ お年寄りのみなさんの車椅子を押し、交流会に向かう。
紙細工の作り方を教わったり、貴重なお話を聞きすばらしい交流会となる。



公演を終えて
感謝の心を表す。

(4) 生徒の感想

- ・すごく楽しかった。やってよかった。本当に感謝している。
- ・練習不足に不安だったが、みなさんが「すごくきれいだった」と言ってくれた。練習を積んでもっと演技を見せたいと思う。もっともっときれいな演技を見せたいと思う。
- ・いろいろな人と触れあい、これからも人に優しく接していきたいと思う。
- ・やり終えての充実感は私たちにとって自信がついたような気がする。
- ・好奇心をもち、いろいろなことに挑戦したいと思う。
- ・次回にお年寄りにもバトンを持ってもらって一緒に楽しんでもらえるようにしたい。
- ・人を楽しませることに喜びを感じ、また逆に励まされた。
- ・私たちのがんばりがお年寄りにも伝わり、心が通じ合えた。
- ・学校の中だけでは学べないことを学ぶことができた。
- ・演技の当日、私たちの公演を楽しみにしておられた一人のお年寄りが亡くなられたとき、とても悲しく、くやしく思った。見せたあげたかった。
- ・めったにできない今回の経験によって、今後の活動に意欲が湧いてきた。
- ・普段は校内の発表だけだが老人ホームで演技をしてみて、もっと外に出て演技をしたいと思った。次は子どもたちの前でやって夢を与えてみたい。



交流の場

(昔の貴重なお話を
聞くことができた)

当日配布された
プログラム
(文字のコントラストと手書きの
メッセージに工夫をした)



(5) 結果と考察

D校バトン部員は、練習の成果を地域で発表できたことにより自信を深め、今後の活動への意欲を高めることができた。そして、感動体験を通じ自己実現ができた。また、地域と学校が結びついて連帯感をもち、心の交流のパイプができた。

部員は当初、学校外で演技を披露することに不安を抱いていたが、練習がすすむにつれて自分自身のがんばりを鑑賞者に伝えることの意義や喜びを考えながら取り組むようになった。相手の立場を思いやる気持ちが養われ、社会性や豊かな心をはぐくむことができたと思う。とくに老人ホームでの発表は一方通行的な感動ではなく、交流の場を通して人生の先輩からたくさんのアドバイスをいただけたところにも大きな意義があった。また部員の共通した感想に見られるように、学校以外でも学ぶ機会があることや自分の力を人のために役立てることの大切さを学べたことは、大きな収穫であったといえる。また、この公演を楽しみにしておられた一人のお年寄りが当日に亡くなられたことは部員の心に悔しさや悲しさを刻み、生きることについての考えが深められた。

学校内では何か覇気がない、疲れ切って生き生きとしていない生徒がいる。多様な情報の中でどうしたらいいのか自己理解に戸惑い、また自己表現も苦手なのかもしれない。教師は学校の中で気付かない生徒の潜在的な資質・能力を伸ばさせる機会を提供する必要がある。そのためには教師自身が多くの情報を持ち、創意工夫を行うことが大切である。学校内にとどまらず、生徒が地域の中で奉仕活動を体験するよう指導・援助することにより、人間としての在り方生き方を見つめさせることが必要である。

IV まとめ

本年度特別活動部会教育研究員は21世紀を生きぬく生徒の育成のためには、考える力、社会性、豊かな心などの「生きる力」をはぐくむことが重要であると考えた。社会情勢の変化により、集団の一員としての自己の役割意識が稀薄化し、自己の存在感が不安定化してきている。しかしながら、生徒は声高に発言せずとも、望ましい集団の中で、自己の存在を主張し、自己を認めてほしいという欲求があるはずだと、アンケート調査の結果から本年度研究員は考えた。

そこで、保護者や地域の人との交流をする「体験の場」の設定を重視し、研究主題「望ましい集団活動の中で自己を生かす体験を通じ生きる力をはぐくむ指導の工夫」を掲げ、A、B班2つに分かれ、副主題として以下を設定し、実践研究を進めた。

A班 「人の気持ちや考えを認め合う場を設定し、豊かな人間性をはぐくむ指導の工夫」

- 部活動 生徒が保護者や地域の人と互いに技術を高め合い、気持ちを通じ合える場を設定することにより生徒の社会性を養う
- ホームルーム活動 一人一人の生徒が文化祭に積極的に参加するよう援助することにより豊かな人間性を培う

B班 「集団や社会の一員として、自己実現を図る指導の工夫」

- ホームルーム活動 地域との連携を積極的に推進し充実感や感動体験を与える
- 部活動 集団や社会の一員として地域や福祉施設との連携を活用し、豊かな心をはぐくむ

これらの実践研究の結果、考える力、社会性、豊かな心などの「生きる力」をはぐくむ指導のうえで、重要な観点は以下のようなものであることが明らかとなった。

- ① 生徒の感性は豊かで、その潜在能力は測りしれない。教師は、その力をひきだせるように指導・援助する。
- ② 生徒の実態をよく見極め、興味・関心をひきだす場を設定し、意欲的に行動できるような工夫する。
- ③ 生徒の自主性を育てるためには、教師の「待ち」の姿勢も必要である。
- ④ 生徒を支援しつつ、褒めることにより、自信や意欲をもたせ、様々な場面で生徒がリーダーシップを発揮できるよう指導・援助する。
- ⑤ 異なる年齢層や、価値観の違う者との交流を通じ、生徒に新鮮な発見と喜びを体験させる。

また、課題として挙げられるのは以下の点である。

- ① 特別活動として、計画的・継続的に実施していく体制づくり
- ② 保護者・地域の人との連携をめざした学校の体制づくり

「生きる力」の育成をめざした本研究は、生徒に「体験の場」を提供し、「人との出会い」を重ねていくことで、その目的の一端が達成されることを示したものである。